

千葉県近世六十六部廻国の諸相

一元禄・宝永期の災害と六十六部廻国供養塔造立の考察

小松廣和

千葉県立中央博物館 市民研究員
〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

(2023年10月7日投稿；2024年1月11日改訂；1月12日受理)

要旨 江戸時代に造立された千葉縣市原市の六十六部廻国供養塔を、何時、何処に、誰が造立したかを調べていく中で、天災や疫病との関連が示唆された。それを検証するため県内の供養塔の造立の実態を分析した。年毎の造立数と天災や疫病流行を対応したところ、造立が元禄地震後に集中していることが分かった。被災したそれぞれの村から六部になって廻国に向かい、成就して供養塔を造立し供養会を行っている。ここから地震による犠牲者を弔い供養するという極めて強い動機があったことが推測された。地震発生から供養塔の造立までの数年のタイムラグは、犠牲者の年忌法要の関係であると推定した。

キーワード： 六十六部、廻国納経、供養塔 聖地巡礼 元禄地震 年忌法要

六十六部とは、六部ともいわれ法華経を書写し、それを日本全国六十六州の神社仏閣の霊場に奉納して廻る行脚僧のことであり¹とされ、その廻国巡礼の証とされる石塔「廻国供養塔」が、全国津々浦々に残されている。廻国供養塔は、全国に10,390基(2021年8月31日現在)²が確認され、廻国供養塔データベース³に登録されている。

六十六部廻国巡礼は、中世に始まり、近代初頭まで数百年に渡って続いた世界でも例を見ない巡礼である。近世には、僧や聖のみならず一般在俗者も六部となり、全国の神社仏閣を参詣して納経し、納経帳に寺印(御朱印)を受けたとされている⁴。

筆者の住む千葉縣市原市では、令和元年から2年にかけて「いちほら六十六部供養塔調査の会」が市内全域の供養塔の調査を行い、その結果総数で159基が確認された(2021年12月現在)⁵。この調査によって供養塔は、市内の村々の路傍や寺院の境内、墓地などに数多く残されていることが分かった。図1は供養塔の例である。

筆者は、調査によって明らかになった市原市の廻国供養塔から近世六十六部廻国を考察する中で、市内における供養塔造立の開始は、元禄・宝永大地震との関係を示唆しているように感じられた。そこで、これを検証するため、千葉県における近世六十六部廻国初期に焦点を絞り、供養塔の銘文等から造立の実態を分析した。この分析を通じ、本研究は近世に変容する廻国巡礼信仰の社会的背景と、近世六十六部廻国という現象を考察することを目的とする。

本文中、原則として六十六部廻国行者を六部、六十六部廻国供養塔は供養塔と略称し、供養塔造立地は江戸期

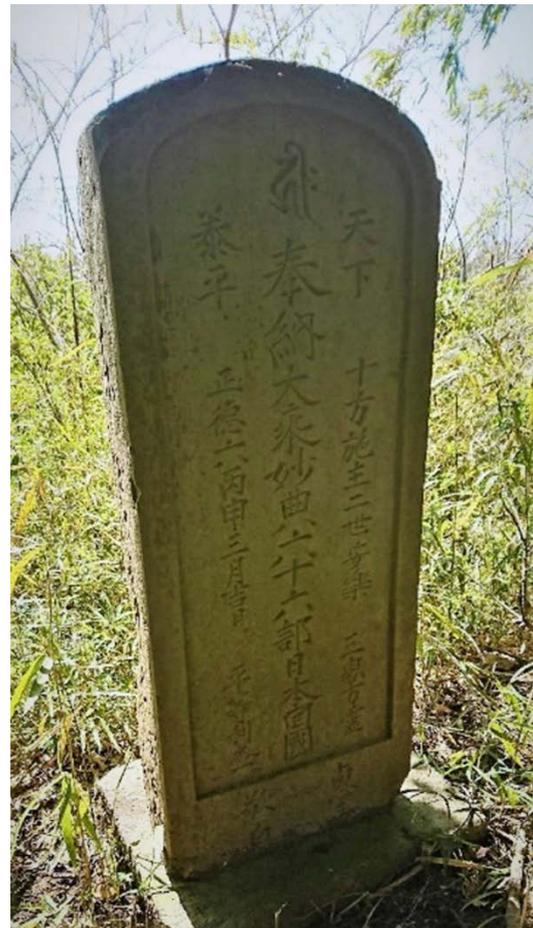


図1. 市原市南総地区の供養塔〔南総10〕2022年撮影

の旧村名で表記する。

1. 六十六部廻国巡礼の先行研究

(1) 本研究で基本とした六十六部廻国巡礼の先行研究

本研究で基本とした、先行研究の主なものは次の三つである。一つは、小嶋博已・田代孝氏等による巡礼論集2『六十六部廻国巡礼の諸相』⁶である。この論集は、大阪府狭山市で1998年12月に開催された「六十六部シンポジウム—廻国巡礼の発生とその変貌—」で発表された論文と六十六部研究論文・資料を紹介したもので、六十六部廻国巡礼研究の原点とも言える論集である。

二つ目は、『六十六部日本廻国の研究』⁷で、上記論集に参加した小嶋博已氏が2022年に刊行したもので、巡礼論集2の研究を踏まえた上で、さらにその論を発展させている。自らの足で全国を調査し、収集した史料をもとに幅広く論考されていることから、その論点は多岐にわたり、六十六部廻国を総合的に研究した、六十六部廻国研究の金字塔と言えらる。従って本論文は、基本的に本書に立脚し、本文中で適宜本書を引用しながら、日本全国を対象とした小嶋氏の研究が市原市や千葉県において有効であるかを検証する側面をもつ。

三つ目は、本研究のきっかけとなった『市原市の六十六部廻国供養塔』⁸である。本書は「いちばら六十六部供養塔調査の会」が行った、市原市の供養塔の調査結果をまとめた報告書である。調査結果は、房総古代道研究会セミナーで発表され『房総古代道研究(五)』に論文が収録され2020年に刊行されている。これが市原市における、六十六部廻国供養塔の調査と研究を体系的に行われた最初の論文と思われる。調査により、市内の各地に供養塔が造立されていることが明らかとなり、筆者が六十六部とは何か疑問を持ち、本研究を始めるきっかけとなった。本論文の市原市の供養塔の情報は、全て『市原市の六十六部廻国供養塔』に基づく。また、この調査結果は「廻国供養塔データベース 六訂版」⁹に反映されているため、あわせて用いている。

以上の先行研究成果の詳細はここでは省略し、必要に応じて各項で引用あるいは要点を提示する。

(2) 供養塔から読み取れること

供養塔の碑文には、「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」に代表的される主銘文が刻まれ、これは文言の違いがあるが殆ど全ての供養塔に刻まれている。これに主銘文の脇や下に「天下泰平・日月清明」に代表される脇銘文が付されている。市原市の例では、約半数に付されていた。この他に、願主として六部の名前やその出身地である生国、造立年月日の日付が刻まれている。この日付には、吉日、吉辰、吉祥日等が刻まれているものもある。

また供養塔には造立の経緯が記されているものがあり、こうした記述からいくつかの分類ができる。六部が造立する供養塔としては、全国66州の神社仏閣を廻国納経して成就したときに建てる「成就供養塔」、あるいは

は廻国の途上で造立する「中供養塔」がある。その他に、廻国途上で無念にも命を落とした六部を看取った村の人々が造立した「途上死供養塔」や、六部が亡くなりその「墓標」として造立された供養塔がある。この他に、地藏菩薩像などの仏像や道標が刻まれ道しるべとして併用されたものや、六部に善根宿や食料を施行して支えた人々の記念碑的「施行供養塔」などがある¹⁰。

(3) 六十六部廻国における千葉県と市原市の地理的位置づけ

房総半島は、東を太平洋、西を東京湾に囲まれた半島である。千葉県は、房総半島を南にして、利根川の河口の銚子市を東端に利根川を遡り茨城県に接し、関宿を北端にして江戸川を下り、西に埼玉県と東京都に接して東京湾となる。江戸時代初期に治水対策と太平洋側からの水運のため、旧利根川と旧鬼怒川間を掘削して直接結び現在の利根川と江戸川としたことにより、千葉県は海と川に囲まれた島のようになっている。これを模したマスコットがチーバくんである。千葉県は、古代から三国に分けられ南は安房国、中部を上総国、その北は下総国で、武蔵国と常陸国に接していた。これが房総三国で、律令期から明治維新まで千数百年続いた国域である。市原市は、千葉県中央部の北西、東京湾に面した位置にある。供養塔が造立された当時は、上総国の北西端に位置し、北を下総国千葉郡(現千葉市)に接し、江戸(現東京都)に歩いて1日くらいで行ける距離にある。地形的には、養老川河口の広い扇状地より南に養老川を遡り、養老溪谷に至る流域に発達した地域である。

六十六部廻国は、全国66州(国)の神社仏閣を、渡し船を除く船や駕籠を使わず徒歩のみで巡礼する。近世の「六十六部縁起」¹¹等によると、武蔵国は浅草寺(現東京都江東区)あるいは武蔵国惣社六所神社(現大國魂神社、東京都府中市)、常陸国一宮の鹿島神宮(現茨城県鹿嶋市)、下総国一宮の香取神宮(現千葉県香取市)、上総国一宮の玉前神社(現千葉県長生郡一宮町)、安房国は清澄寺(現千葉県鴨川市)が主な納経社寺となっている。六部は、これ等の神社仏閣を巡礼し納経を行った。六部が房総半島へ入る経路は、江戸から下総国西部を経る東京湾側のルートと、常陸国から下総国東部を経る太平洋側のルートの二つが想定されるが、いずれのルートでも安房国まで南下し、半島を一周して反対側へ抜けたと考えられる。東京湾側から内陸まで広がる現市原市はこの巡礼道の途上に位置し、房総半島を旅する六部はここを必ず通過した。

(4) 廻国供養塔造立の推移

廻国供養塔は、全国で10,390基確認されている(2021年8月31日現在)¹²。(小嶋氏は供養塔を件としているが、本論文では基と表示する)この内千葉県が1,291基で12.4%を占めている。造立数の割合(%)は、供養塔の調査状況の地域差があり比較はできないが、現時点での調査結果の参考値としてこれを示す。(以

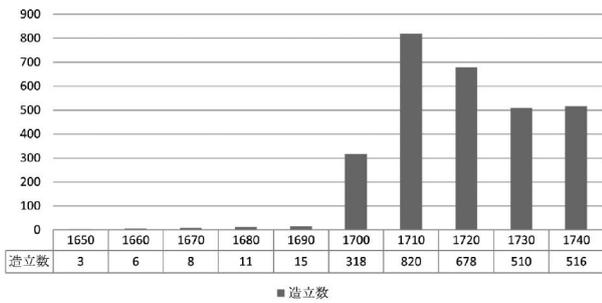


図2. 廻国供養塔年代別造立数（小嶋氏『六十六部日本廻国の研究』264ページ図2収集事例の年代別造立件数より抜粋）

下同様）これを房総3国でみると安房国301基、上総国329基、下総国823基となっている¹³。（注 当時下総国の国域は、現在の千葉県の県境よりも一部茨城県および埼玉県側に広く、このため合計すると千葉県の造立数よりも多くなっている。）小嶋氏の『六十六部日本廻国の研究』より、全国の供養塔造立推移を、1651年から1750年までの近世六十六部廻国初期の100年間を10年単位で示したのが図2。廻国供養塔年代別造立数¹⁴である。（注 グラフの表示は、1650年代とは1651～1660年を示す）この図から17世紀後半から元禄期にかけて造立数は少ないが徐々に増加傾向を示し、六十六部廻国巡礼の関心の高まりを感じることができる。これが1700年代になると一気に318基造立され、ここから供養塔の本格的な造立が始まったことを示している。

（5）廻国期間の推定

廻国期間は、六部が廻国に向かった時期を想定する上で重要である。小嶋氏は六部が残した「納経請取状」や「納経帳」を詳しく調査、分析した結果、廻国行には時期によって3つのタイプがあったとする¹⁵。これを整理すると次のようになる。

タイプⅠ：一国につき一つの寺社へ納経するという原則に近い巡り方をして、納経寺社数は60ヶ所から100ヶ所で、廻国期間は1年半からせいぜい2年余りで結願している。18世紀初頭の1701～1710年（元禄末～宝永）の廻国になる。

タイプⅡ：一国あたり3～10ヶ所の寺社に納経を行い、総数は全国で200ヶ所前後から700ヶ所近くにのぼる。1710年代以降（おおむね正徳以降）に見られ、事例数が多く全期間を通じている。これが近世中・後期の六十六部廻国の最も一般的な様式とみなすことができる。

タイプⅢ：納経寺社数が数百ヶ所にのぼり、廻国期間が非常に長く、10年から20年におよぶ。長期の旅であるにもかかわらず、六十六部納経の成就に至っていない、職業的六十六部。1800年代以降（享和以降）に属する。

タイプⅡの廻国期間は言及されていないが、同書の「表3 本章で取り上げる近世の納経帳¹⁶」より類推する

と3～6年位と思われる。これらから、廻国に要した期間は宝永期頃までは1年半～2年であり、正徳期を境に3～6年間と、僅かな期間のうちに増加していたと理解できる。

2. 近世六十六部廻国巡礼の背景

（1）近世六十六部廻国供養塔造立の一般的な理解

小嶋氏は「六十六部日本廻国の研究」で、廻国供養塔の造立年代の明確な9,364件の年代別造立件数を調べた結果から、次のように述べている。

近世の状況でなによりも注目すべきは、十八世紀初頭の劇的ともいえる大量出現であろう。じつはこの十八世紀初頭には、廻国供養塔以外の他の六十六部関係史料も登場してくる。六十六部廻国者の納経帳の初見は管見の範囲では元禄十四年（一七〇一）から翌十五年にかけてのもので、以後、元禄・宝永期のものが多数、確認されている（第二部第二章）。六十六部縁起も、刊本として登場するのはほぼ同時期で、現在、元禄三年（一六九〇）・宝永二年（一七〇五）・同五年のものが知られ（第一部第一章）、さらに六十六部の納経所を一覧するリストも元禄四年・宝永四年に板行されている（第二部第二章）。元禄から宝永にかけて、近世の六十六部を特徴づける諸要素がそろって出現しているのである。単に供養塔造立にとどまらず、六十六部廻国巡礼そのものが、この十八世紀初頭に一つの大きな画期を迎えたとみる必要がある¹⁷。

また更に、

もとより、こうした現象が生起するためには、民衆の巡礼の旅が容易になるという社会的条件が必要である。元禄前後、すなわち十七世紀末から十八世紀初頭にかけては、近世前期の農民一般の社会的経済的上昇、都市経済の発展、交通インフラの整備などによって、交通量・参詣量が急激に増加した時期とされている。また、十七世紀後半には民衆の墓塔や庚申塔その他の石塔・石仏の造立が隆盛に向かっており、民衆が石造物を建てられるようになる環境も出現していた。十八世紀初頭の廻国供養塔の大量出現は、こうした二つの条件が充足されることによって引き起こされたとみることができる¹⁸。

と述べている。後者は小嶋氏の持論というよりも、近世の石造物（石仏）と巡礼・参詣者の増加に対する一般的な理解といえ、これを近世の廻国供養塔造立に当てはめたものである。一方で、小嶋氏は上記に付した註(21)で、次のように述べる。

註(21) ただし、墓塔にせよ種々の石塔類にせよ、他の石造物をみると、地域差はあるものの一般にはいまして早い十七世紀中葉ないし後半に出現して、いまして穏やかな曲線を描いて増加してゆくの通例である。廻国供養塔の本格的出現はそれによや遅れ、かつ、いったん登場すると爆発的な急増

現象をみせる。背景に民衆の巡礼・参詣全般の大規模な増加があるとはいえ、一般的な条件のみでこの現象が説明できるかどうか。そこになお、検討の余地が残っていると考える¹⁹。

小嶋氏は、供養塔造立が18世紀初頭の「爆発的な急増現象」を、一般的な条件のみで説明可能かに疑問を呈す。筆者は、小嶋氏の言うこの「検討の余地」こそが、近世の六十六部廻国の社会的背景を考察する上で最も重要な点だと考える。本研究は、この供養塔造立の「爆発的な急増現象」を、市原市や千葉県の供養塔の造立実態から検証するものである。

(2) 近世六十六部廻国の背景

上記の小嶋氏の指摘のように、18世紀に入っの供養塔増加は、他の石造物の増加傾向から見ても特異な現象であった。中・近世の石造塔を研究した池上悟氏は「六十六部廻国供養塔²⁰」において次のように述べる。

この十八世紀に入っの急増という点は、独りこの廻国供養塔に窺われるのみで無く、諸国の著名な仏閣の本尊の出開帳も同時期に盛行する様相が明らかになっており、廻国とは逆の実態ではあるものの、関連する宗教的行事として留意されるところである²¹。

つまり池上氏は、石造物や巡礼の増加といった廻国供養塔に直接関係のある現象から視点を広げ、出開帳という、いわば霊場の方が民衆のもとへ来るといふ、廻国とは対称に位置する宗教的行事と考え合わせる必要を述べる。また、江戸期に数度訪れる供養塔造立の減少時期に、江戸三大飢饉のうち2時期が相当していることを指摘し、飢饉が廻国に与えた影響に言及している²²。

人々が廻国や出開帳を通じ、霊験あらたかな神仏との結縁を願う背景には、社会不安が窺われる。それは濁世末法といった宗教的観念ではなく、より現実的な現象を想定しなければならない。

元禄時代には、東北地方で7万人から10万人の餓死者が出たとされる元禄の飢饉(1695～6)²³の後、災害が頻発している。倉地克直氏²⁴によれば、麻疹や疱瘡が流行して多くの死亡者が出ている中²⁵、元禄16年(1703)11月23日に元禄大地震が発生し、房総半島の被害は甚大で6,500人以上、小田原藩で2,300人が、全被災地で1万人以上亡くなったとされている。江戸ではこの6日後大火災が発生し3,000人が亡くなり、地震火災とも言われている²⁶。さらに、この地震のわずか4年後、宝永4年(1707)10月4日関東地方から九州にかけて再び巨大地震が発生し、広域で5,000人以上が死亡したとされる²⁷。同じ年の11月23日には富士山が大噴火し(宝永噴火)火山灰が降り広域に被害が出ている²⁸。この時期は、華開く元禄文化を享受し、都市民の富裕化が進む一方、相次ぐ天変地異が飢饉や疫病と重なり、人々の不安が募っていた。これが神仏による救済を求め、霊場への関心を強めた背景にあると考えられる。

一方、小嶋氏によれば、この時代は六十六部廻国にとっても特別な時期であった。前述のように元禄3年(1690)には六十六部縁起が、六十六州の納経所を一覧するリストが元禄4年に相次いで板行され、さらにこれ等の版本は、宝永にかけて、何度も版を重ねている²⁹。六十六部縁起は書写されて寺社等に特別に伝えられていた³⁰ものが、木版刷りにより大量に出回ることになり、さらに版を重ねている。多くの人が六十六部廻国に関心を持ち、それを求めていた証に他ならず、世の中に六十六部廻国納経の機運が高まっていたことを示すものである。

3. 元禄・宝永大地震と六十六部廻国供養塔造立

(1) 市原市における六十六部廻国の開始

市原市内の供養塔を調査し、誰が、何時、何処に供養塔を造立したかを調べ、六部が不惜身命で廻国に向かった動機を考察する中で、地震等の天災や疫病流行と供養塔の造立に関係があるのではないかと考えるに至った。これを検証するため、市原市の天災と疫病の流行と供養塔造立の関係を表にした。その表から元禄元年(1688)より享保4年(1719)までの期間を抜粋したものが、表1. 天災・疫病流行と六十六部廻国供養塔【市原市版】である。縦軸に西暦年を、横軸に『市原市の六十六部廻国供養塔』の供養塔番号で、1基1桁で横積み上げグラフにしたものである。その右の欄から順に、地震と津波、火山噴火を、次いで風水害や冷害、飢饉を、その右に疫病の流行、右端の欄に火事や備考として被災者数等をまとめたものである³¹。供養塔番号は、『市原市の六十六部廻国供養塔』に示された供養塔固有の番号で、この番号を見れば、立地場所や造立年月日、願主や主銘文等全ての情報を確認することが出来る。以下、表の供養塔番号及び本文中【 】内数字は供養塔番号である。

市原市で最初の供養塔は、君塚村(現市原市君塚)の真言宗明光院山門前に造立された地藏菩薩立像【市原24】で、宝永5年(1708)9月に造立されている。願主は九州豊前国の観空道者である。図4は、市原市で現存最古の供養塔である。

次にその1ヶ月後の宝永5年10月11日、隣の五井村の真言宗龍善院中瀬墓地(現市原市五井中瀬)に供養塔【五井3】が造立されている。この供養塔は、上総国夷隅郡長志村(現いすみ市長志)の順西法師の菩提を弔うものである。順西法師は宝永4年5月9日に佐原の伊能家の善根宿³²に宿泊したことが、伊能景利の残した「日本廻国六十六部宿泊帳」に「上総国同郡伊南庄長志村道心順西坊」と記録されている³³。このことから順西法師は、宝永4年5月頃に長志村を出立し、太平洋側を巡り佐原で一泊して廻国し、その約1年半後に五井村で亡くなったと推測される。出立から約1年半を経て上総国に戻っていることから、タイプIの廻国期間に合致し、既に廻国納経は成就していたと考えられる。あと一歩で長志村に帰村するところであったが、無念に

表 1. 天災・疫病流行と六十六部廻国供養塔【市原市版】

年号	西暦	六十六部廻国供養塔造立								災 害 ・ 飢 饉 ・ 疫 病 ・ 火 事 ・ その他			
		1	2	3	4	5	6	7	8	地震・津波・火山噴火	風水害・冷害・飢饉	疫病等	火事&備考
元禄1	1688												
2	1689												
3	1690												
4	1691											・(江戸)麻疹	
5	1692												
6	1693												
7	1694												
8	1695										・元禄の飢饉		弘前藩、盛岡藩10万人以上餓死
9	1696										・元禄の飢饉	・(畿内)疫病	
10	1697												
11	1698												
12	1699												
13	1700												
14	1701												
15	1702											・痘瘡	
16	1703									・元禄地震・津波			・房総半島6500人死亡
宝永1	1704												江戸300人・小田原2300人死亡
2	1705												江戸地震火災3000人死亡
3	1706												
4	1707									・宝永地震・津波/宝永富士山噴火			・東海から九州地方、5000人以上死亡
5	1708	市原-24	五井-3									・麻疹	
6	1709	五井-2											
7	1710												
正徳1	1711	三和-29											
2	1712										・洪水畿内、西国		
3	1713												
4	1714										・暴風雨畿内	・風邪	
5	1715												
享保1	1716	三和-35	南総-10									・(畿内)疫病	・江戸放火大火災多発
2	1717	南総-13										・麻疹	
3	1718	姉崎-1										・麻疹	
4	1719											・麻疹	

出典 「過去の災害一覧」内閣府防災情報より抜粋編集
『江戸の災害史』倉地克直著 中公新書 表-8 江戸時代の主な疫病流行より抜粋編集
『飢饉 飢えと食の日本史』菊池勇夫著 集英社新書より抜粋編集
『市原市の六十六部廻国供養塔』いちほら六十六部供養塔調査の会より抜粋編集

も当地で命を落とし、村の人々によって中瀬墓地に葬られ、供養塔が造立されたと推測される。如何なる手段を使っても帰村可能な距離であるが、順西法師は六部の本懐である不惜身命で廻国に向かった身であることから、この地で村の定めに従って葬って頂くことを願ったと思われる。

その約1年後、宝永6年(1709)10月5日に同じ五井村の浄土宗 守永寺(現市原市五井中央西)境内に久誉行水と心光浄誉の舟光背型の地藏菩薩立像の供養塔『五井2』が造立されている。この供養塔には「廻国成就所」と刻まれている。この供養塔は地藏菩薩像を浮き彫りに刻み、「為六親眷属万人快樂也」とされている。これが廻国の動機に深く関わっていると思われる。

市原市の近代六十六部廻国供養塔の造立は以上の3基から始まっている。供養塔所在地は東京湾沿いの古代の駅路とされる主要道沿いの当時の街部で、真言宗と浄土宗の寺院・墓地内である。市原市では、ここから内陸に向けて時間をかけて供養塔の分布が広がり、養老川上流の黒川村(現市原市朝生原)に供養塔が造立されるまで18年を要した。そして、この黒川村の供養塔を契機とするように、一般在俗者による供養塔造立が増加して

いく。

さて、既に述べたように伊能景利の「日本廻国六十六部宿泊帳」の記録から、『五井3』の供養塔に関わる順西法師は約1年半で廻国を成就させ、上総国に帰国していたと考えられ、他2基の六部も同様にタイプIの期間で廻国を行った可能性が高い。この3基の供養塔の造立年から六部の出立時期を逆算すると、いずれも宝永4~5年頃と推測される。宝永4年10月に発生した宝永地震に近い時期だが、この地震では房総半島は大きな被害はなかったとされる³⁴。また、『市原24』の供養塔の観空道者は豊前国出身であり、宝永地震によって九州地方では豊後水道の両側や日向国で津波による死亡者が出ている³⁵が、観空道者は宝永地震以前に豊前国を出立している可能性もあり、廻国の発願との直接の因果関係は不明瞭である。筆者はむしろ、六部たちの出立時期から4~5年前に発生した元禄地震との関係を推測した。元禄地震が六部たちを廻国へ向かわせたとするれば、なぜこの4~5年のタイムラグが生まれたのだろうか。

そこでこれを考察するため、「廻国供養塔データベース 六訂版」により、房総3国である千葉県の実態を調

査した。

(2) 千葉県(房総3国)の近世六十六部廻国供養塔造立最初期

千葉県は、現在全国で最も多く供養塔が確認されており、日本全体の12.4%にあたる1,291基を数えることは前述のとおりである³⁶。全国の供養塔造立推移を示した図2「廻国供養塔年代別造立数」に対応した千葉県の供養塔造立推移を示したのが、図3「千葉県廻国供養塔年代別造立数」である。全国で廻国供養塔が、1700年代(1701～1710年)の10年間に突然318件造立された³⁷と小嶋氏が述べている同時期、千葉県では68基が造立され全国の21.8%を占めていた。小嶋氏が「爆発的な急増現象」と示した同時期、千葉県の供養塔造立が、全国の供養塔造立の2割以上を示していたことは、急増現象の一翼を担っていたことを示すものである。

更にこれを検証するため、県内の造立数1,291基の内、造立年不明や文久期より後(1865年以後)・その他を除いた1,196基を市原市と同様の積み上げグラフにした。その結果から供養塔造立最初期の元禄元年(1688)から享保4年(1719)を抜粋したのが、表2。天災・疫病流行と六十六部廻国供養塔【千葉県版】である。この表は、市原市の供養塔番号に替え「廻国供養塔データベース六訂版」の供養塔sqNo.を用いている。sqNo.は、供養塔固有の番号で、この番号を「廻国供養塔データベース六訂版」で見れば、立地場所や造立年月日、願主や主銘文等全ての情報を確認することが出来る。以下、表の供養塔番号及び本文中【】内数字はsqNo.である。

この表から分かるように、千葉県では1701年からの10年間ではなく、元禄大地震の後の1705年から1710年の6年間に67基の造立が集中している。このことから、千葉県における近世六十六部廻国供養塔造立は、明らかに元禄大地震の後の宝永2年から始まっている。

供養塔造立状況をみると、元禄期は元禄6年(1693)と元禄16年(1703)に造立され、この2基が元禄地震の前に造立された供養塔である。

元禄地震の後、宝永元年(1704)は供養塔の造立が全く無く、宝永2年の3基から造立が始まっている。以後、同3年に5基、同4年に13基、同5年に一気に23基となり、わずか4年で爆発的に増加しピークを迎えている。この宝永5年の年間造立数23基は、約50年後の宝暦5年(1755)に同数の造立があるのみで、千葉県では年間最多の造立数である。この異常ともいえる事実は、六部たちが六十六部廻国に極めて強い動機を持ち、ほぼ同じ頃に一斉に廻国に向かったことを示している。

供養塔造立最初期の宝永年間(1704～1710年)に造立された供養塔は、22市町村で67基になる。造立数は、市町村によって調査の度合いが異なるので一概に比較は出来ないが、この内で最も多かったのが匝瑳市の9基で、次が香取市で8基、以下成田市7基、いすみ市6基、南房総市5基の順である。この内房総半島

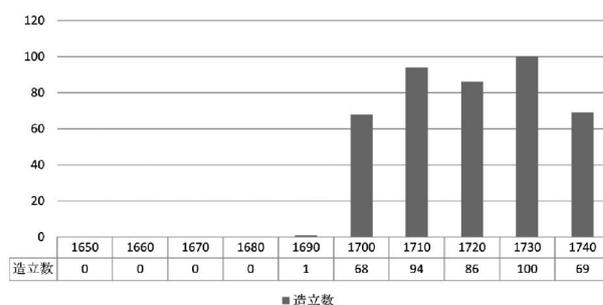


図3. 千葉県廻国供養塔年代別造立数(廻国供養塔データベースより抜粋)

南部から九十九里海岸沿いの8市町村の合計が、30基(44.8%)で半数近くを占めている。この地域で上記3市の他、旭市4基、鴨川市3基、館山、山武市、横芝光町が各1基である。

六部名が明確な供養塔は、51基で77人となっている。これを聖俗別にみると、僧や聖と思われる六部は64%、俗名あるいは四字法名の六部が36%であった。市原市の場合、宝永、正徳期は僧や聖と思われる六部のみで、在俗の六部による供養塔造立は享保期の後半になってからであったのに対し、この地域は最初期から一般在俗者が六部になって廻国に向かっている特異性があることが分かる。

具体的に造立されている供養塔の主なものを見ると以下の通りである。元禄大地震の後、最初に造立された供養塔は、宝永2年(1705)2月24日我孫子市布佐の真言宗延命寺に造立された供養塔【1928】で、次のような碑文が刻まれている。

奉納大乘法花妙典六十六部書写 名号六十六万遍
為六親眷属二世安楽也乃至法界平等利益開眼供養
導師海珠山徳満寺法印寛隆敬白 衆僧廿余人 大願
主沙門勝恵謹書
寺主延命寺現住法印快賢 助力之施主 岩井村橋本
長右エ門・名内村秋谷太良右□□エ門・白幡村山崎
新左エ門(下線筆者)

この供養塔は廻国供養塔ではなく、法華滅罪の経である法華経を66部書写して供養塔を造立して供養をしたものである。利根川の対岸の現茨城県利根町布佐の徳満寺法印寛隆を導師に迎え、衆僧20余人により、近隣村々あげて盛大な供養会を執り行っている。この法華経六十六部書写は、「六親眷属二世安楽乃至法界平等利益」とされていることから、延命寺の沙門勝恵によって、元禄地震の犠牲者を弔い供養するために行なわれたと推定される。名号を唱えて祈りながら法華経を66部書写して供養塔を造立して開眼供養をしている。過つての六部は、法華経を66部書写して廻国して神社仏閣に納経していたが、ここでは、法華経を書写することそのものを、特別なこととして供養塔を造立して大法会を修している。これが、当時の六十六部廻国納経の現実の姿の一端を物語っている。

次に、宝永期に造立された供養塔の半数弱を占める、房総半島南部から九十九里海岸沿いの8市町村の特に



図 4. 市原市現存最古の供養塔【市原 25】2022 年撮影

ら村の人々の間には、廻国納経に非常に強い思いがあったことが伺える。市原市の場合、苗字を名乗った六部は、享保年間から享和年間に限られ、それ以後は供養塔に刻まれているのは名前だけの六部で、苗字を名乗った六部は家督を息子に譲り隠居して廻国に向かったと推測された。

既に述べた通り、元禄 16 年 11 月 23 日未明に起きた大地震で、房総半島では 6,500 人が亡くなったとされている。地震で大地は荒れ狂い、家々は倒壊し、沿岸部は打ち寄せる津波に流され、なすすべもなく一瞬にして多くの人々が亡くなった。この世の地獄を見た人々は、神仏の怒りであり崇りと恐れ、これを鎮め祓い贖うため廻国納経に救いを求めたのではないだろうか。村の人々の中から犠牲者を弔い供養するため六部になって、古代より 66 州の国の鎮守とされた一宮や、法華滅罪の寺として国ごとに鎮護国家の寺として造立された国分寺等の霊場を、廻国納経し成就して帰村し、犠牲者を弔い供養する供養塔を造立し供養会を行ったことが考えられる。

千葉県全体で見ても、供養塔の造立された時期からそれぞれの六部が廻国に出立した時期を逆算すると、元禄地震から 3 年後がピークとなる。初期の六部たちが、地域の宗教者や村々から身命を賭して廻国へ向かった信心の篤い人々であったことを考えると、元禄大地震によって亡くなった人々の一周忌・三回忌の法要を疎かに

したとは考え難い。千葉県では、供養塔の造立は元禄大地震の一年後の宝永元年には、全くされていない。三回忌にあたる翌宝永 2 年から造立が始まり、七回忌の前の年の宝永 5 年にピークになっている。一周忌と三回忌の間に日本全国を行脚し廻国を成就させることは難しいが、三回忌を終えた後に出立して七回忌法要（宝永 6 年）の前に帰村することを目指した廻国とすれば、十分に現実的な行程であるし、宝永 5 年に供養塔の造立がピークになることにも説明がつく。

その後、十三回忌となる正徳 5 年（1715）頃までは、年間 10 基から 15 基の造立で、後に漸減して享保 4 年（1719）に 5 基造立され供養塔の造立数が最低となる（表 2. 参照）。この時期に続く廻国は、宝永の地震や富士山噴火を受けて行われたものである可能性もあろう。だが、元禄地震に比べ房総半島での被害が小さかったことが、供養塔の増加には繋がらなかったと考えられる。

これ等のことから、最初期の廻国は、元禄大地震の犠牲者の法要に合わせた供養の廻国であったことが推定される。特に七回忌というタイムリミットの決まった廻国は、時間をかけることはできず、足早なものだっただろう。これが、小嶋氏が示した近世六十六部廻国初期のタイプ I の廻国にあたると思われる。

亡くなった人の法要は、現在は合理化され省略されがちであるが、過っては葬式と同様極めて重要で、回忌法要には遠い親戚縁者まで集まり盛大に執り行われた。従って、家督を息子に譲っていた可能性があるが、冠婚葬祭を取り仕切る一家の主が、廻国とは言え家を空けている間に法要を行うことは避けるべきことであっただろう。宝永期に供養塔を造立した地域は県内全域にわたるが、特に多い地域は房総半島南部から九十九里海岸沿いの 8 市町村で、地震による被害が特に大きかった地域と重なる。同じ村から僧のみならず、在俗者が小グループに分かれて廻国に向かい、廻国供養塔を造立し供養会を行っていることは、地震による犠牲者を弔い供養するという極めて強い動機があったことを示唆している。これ等のことから、千葉県における近世六十六部廻国は、元禄大地震をトリガー（契機）として本格化したと考えることが出来る。元禄大地震による犠牲者を弔い供養する、幸い生き延びた人々の祈りの廻国であった。

4. 千葉県の近世六十六部廻国の諸相

近世六十六部廻国は、小嶋氏によると 1700 年代（1701～1710 年）の 10 年間に供養塔が全国で一気に造立され、ここから本格化したとされる。千葉県の実態を調査した結果、千葉県も同様の傾向を示し統計上は 10 年間であるが、実際の造立は元禄大地震の後の宝永 2 年（1705）からであった。このことから、千葉県では元禄大地震を機に供養塔造立が始まったと考えられる。

ところが、近世の六部廻国そのものは今少し早い時期に始まっており、六部は房総半島を巡っていたらしい。

伊能忠敬の義理の祖父である伊能景利は、下総国一宮の香取神宮の門前町の佐原村(現佐原市)で、宝永3年10月から翌4年9月までの1年間、亡くなった両親の菩提を弔うため善根宿の施行を行い、宿泊した六部を「日本廻国六十六部宿泊帳」に記録している。この「宿泊帳」によると、宝永3年には東国のみならず、北は奥州から南は九州日向国まで、地震の被害を受けていない地域からの六部も宿泊している³⁸。これらの六部は、千葉県内から出立する六部と違い、元禄大地震を廻国の直接の動機としていない。元禄地震の前から浄土宗や真言宗の僧などにより近世の六十六部廻国が行われていたことは、既に小嶋氏などが指摘しているが、千葉県内においても廻国行の開始と供養塔造立の開始には若干タイムラグがあった。

六部にとって房総半島は、安房国の納経所とされた清澄寺が半島の南岸部山中に位置していることから、西は東京湾側から、東は太平洋側から廻国しても房総半島の海岸沿いをほぼ一周することになり、多くの六部が半島南部の海沿いの村々を托鉢し、日々善根宿を求めていたと考えられる。これらの地域に住む人々にとって、六部は比較的早い時期から身近な存在であり、得られた六部に関する情報や知識も豊富であっただろう。

近世最初期の六部は、僧などが主で六十六部廻国縁起に示された六波羅蜜の修行のために廻国していたと思われる。これ等の六部は僧であったことから、元禄大地震の発生直後から被災地で経を読誦し、あるいは念仏を唱えて懇ろに犠牲者を弔い、道々に供養をして巡っていただろう。このことは、近年発生した東日本大震災の時、各宗派の僧侶が、津波で多くの犠牲者が出た被災地を巡り、荒涼としたがれきの中で犠牲者の供養をして廻っていた姿と重なる。

文化年間に廻国を行った日向国佐土原(現宮崎県宮崎市佐土原町)の野田泉光院は、廻国を記録した「日本九峰修行日記」を残している。泉光院は、六部ではなく真言宗の当山派の山伏で、安宮寺の住職を譲り大先達として廻国している³⁹。泉光院は、日記に各地で頼まれて亡くなった人の供養のため、仁王経や法華経を読誦して供養したことを記している。このことは、檀家寺の住職による回忌法要による供養とは別に、泉光院のように全国の神社仏閣を巡礼して来た廻国行者による供養を、人々は特別な供養として重要視していた様子が見て取れる。

このことを考えると、元禄大地震後、被災地を出立した多くの僧と思われる六部が、泉光院と同様被災地で亡くなった人を供養するため、経を読誦しあるいは念仏を唱えて供養して巡ることは、極、自然な成行きであろう。ここで、再び宝永4年10月4日に宝永大地震が発生した。東海道沿岸から紀伊半島、四国、九州東岸にかけ広域で甚大な被害を受けたが、ここを巡る六部は、犠牲者の供養を行いつつ神社仏閣に納経して巡った。そしてここから六部による供養の連鎖が起き、その輪は更に全国に広がっていった。これ等のことから、近世六十六部の廻国は、個人的な六波羅蜜の修行を超え、供養と救

済という民衆の信仰の機能を担うようになったと考えられる。

一方、被災直後は六部に犠牲者の供養を願っていた村人たちは、後に自ら六部となって、三回忌法要を済ませた頃から、犠牲者を弔い供養し村中安全を祈願するため次々に廻国に向かい、七回忌法要の前に帰村して供養会を行うべく足早に廻国した。これが宝永5年に供養塔の造立がピークとなった証左であろう。

これ等のことを総合して考察すると、千葉県における近世六十六部廻国は、元禄大地震による甚大な被害を受けたことを機に、全国66州の神社仏閣に「天下泰平、国土安穩」を祈る廻国と、供養塔を造立して犠牲者を弔う供養とが一体化して、六十六部廻国に新たな意義を見出した。ここに小嶋氏が指摘された当時の社会的諸条件が重なり、満を持したかのように一気に近世六十六部廻国巡礼が一般化した。所謂、六部の廻国納経が六波羅蜜の修行廻国から、供養し功徳を積む供養廻国に意義が大きく変わり、ここから在俗者にも廻国の道が開かれ、多くの僧とともに在俗者が六部になり廻国に向かい供養塔を造立した。

更にこの六部になり廻国することそのものが功徳を積むことである観点から、供養のため、より多くの神社仏閣を参詣し納経するようになった。この廻国が、小嶋氏が示した廻国のタイプⅡで、元禄大地震の犠牲者の供養が一段落した正徳期以降の廻国がこれに当たる。これがさらに廻国を成就して供養塔を造立することのみならず、廻国の途上で中供養塔を造立する意味でもあり、そこには六部と施行をする在地の人々の間に、石塔を造立して供養を行う強い思いがあったとみることが出来る。市原市の例では、他国の六部が供養塔を造立した例が全体の約20%あった。

さらに後期になると、供養塔造立を名目にして、在地の人々との結縁・勸進を生業にした六部が生まれた⁴⁰。彼らは廻国自体を目的とはしないため、廻国を成就しないこともあった。これが廻国のタイプⅢにあたる。

これは何れも当時の社会が求めた機能に合わせ、六部と廻国のあり方が変化したものとも解釈できる。これが、筆者が市原市の廻国供養塔から、千葉県における近世六十六部廻国初期の供養塔造立の実態を調査し考察した結論である。

おわりに

本研究は、六部によって個々に造立された供養塔より、近世六十六部廻国初期の元禄大地震と廻国の関係を検証する試みであった。これにより廻国の初期の動機や元禄大地震との関係等の一端を明らかにすることが出来たと自負している。今後、在俗の六部と供養塔の造立場所や村人との関係、さらに関東地方の都県をはじめ全国規模で同様の調査をすることによって、元禄、宝永地震と供養塔造立の関係、飢饉や疫病流行と廻国の関係、近世の六十六部廻国の全体像、地域差や東西の国による違

いなどが明らかになる可能性が考えられる。これ等のことは次のテーマとして取り組む計画である。

謝 辞

ここに、全国の廻国供養塔の情報をデータベース化し、六十六部日本廻国巡礼研究の集大成として『六十六部日本廻国の研究』を刊行された小嶋博己氏と、市原市の六十六部廻国供養塔の調査を主導した房総古代道研究会長の山本勝彦氏及び千葉県文化財保護協会早川正司氏に敬意を表するとともに、山本氏には個々にご指導頂いたことに感謝します。

本研究は、千葉県立中央博物館の市民研究員として研究を採用して頂き、博物館の全面的な支援のもと、自然誌・歴史研究部 米谷博部長及び歴史学研究科 鈴木建人研究員のご指導を頂いて論文にまとめることが出来た。ここに、ご支援・ご指導頂きましたことに心より感謝致します。

註

- (1) 中村元・福永光司・田村芳朗・今野 達・末木文美士編 2014 『岩波仏教辞典 第二版』
- (2) 小嶋博己 2022 『六十六部日本廻国の研究』、法蔵館、261 ページ
- (3) 註 2 小嶋同書 292 ページ、「廻国供養塔データベース」六訂版」註 9 参照
- (4) 註 2 小嶋同書 137-138・288 ページ参考
- (5) いちはら六十六部供養塔調査の会 2020 『市原市の六十六部廻国供養塔』、房総古代道研究会及び同会 2023 『市原市の六十六部廻国供養塔（追補）』
- (6) 小嶋博己・田代孝 他 2003 『六十六部廻国巡礼の諸相』、岩田書院
- (7) 註 2 小嶋同書
- (8) 註 5 いちはら六十六部供養塔調査の会同書
- (9) 小嶋博己 他作成「廻国供養塔データベース（六訂版）」、ノートルダム清心女子大学学術機関リポジトリ公開 (<http://id.nii.ac.jp/1560/00000498/>)
- (10) 註 2 小嶋同書 271 ページの分類による
- (11) 註 2 小嶋同書 184 ページ
- (12) 註 2 小嶋同書 261 ページ、「廻国供養塔データベース」六訂版」註 9 参照
- (13) 註 2 小嶋同書 262 ページ
- (14) 註 2 小嶋同書 264 ページ 図 2 収集事例の年代別造立件数（造立年代の判明する 9,364 件につき）より引用編集
- (15) 註 2 小嶋同書 205-206 ページ
- (16) 註 2 小嶋同書 193 ページ
- (17) 註 2 小嶋同書 266-267 ページ
- (18) 註 2 小嶋同書 267-268 ページ
- (19) 註 2 小嶋同書 294 ページ 廻国供養塔造立の推移
- (20) 池上悟 2007 『六十六部廻国供養塔』、『石造供養塔論攷』、ニューサイエンス社、初出 1991 『考古学論究』
- (21) 註 17 池上同書 259 ページ
- (22) 註 17 池上同書 257 ページ
- (23) 菊池勇夫 2000 『飢饉 飢えと食の日本史』、集英社新書、70 ペー

ジ

- (24) 倉地克直 2016 『江戸の災害史 徳川日本の経験に学ぶ』、中公新書、69・77 ページ
- (25) 註 21 倉地同書 97 ページ
- (26) 註 21 倉地同書 68-71 ページ
- (27) 註 21 倉地同書 75-78 ページ
- (28) 註 21 倉地同書 80-81 ページ
- (29) 註 2 小嶋同書 266-267 ページ
- (30) 註 2 小嶋同書 19-28 ページ
- (31) 出典は①「過去の災害一覧」内閣府防災情報 ② 註 21 倉地同書 ③ 註 20 菊池同書より、抜粋編集して表にした。死者数も上記に基づいた。
- (32) 六部や巡礼者などを無料で泊める宿、これを専門的に行っていたところが千人宿、通常はその日の宿を一般の家に願い、善意で泊めて貰った。
- (33) 米谷 博 2002 「伊能景利収集の石標本と六十六部廻国行者」『伊能忠敬記念館年報』第 5 号、伊能忠敬記念館、18 ページ 表 3 六十六部廻国者宿泊一覧
- (34) 註 21 倉地同書 77 ページ 表 3 宝永大地震の被害状況
- (35) 註 21 倉地同書 77-78 ページ
- (36) 註 2 小嶋同書 262 ページ 表 1 収集事例の都道府県別件数
- (37) 註 2 小嶋同書 265-266 ページ
- (38) 註 30 米谷 2002 表 3 より。この内訳は、東国 8 国の出身が 35 人で 61.4% を占めている。東国以外では、丹波 4 人、奥州 3 人、山城国 2 人、遠江 2 人、紀州 2 人、周防 2 人、安芸、美作、筑前、日向、肥前、信濃、佐渡国が各 1 人である。
- (39) 野田泉光院「日本九峰修行日記」及び鈴木棠三「日本九峰修行日記 解題」宮本常一・原口虎雄・谷川健一編 1972 『日本庶民生活史料集成 第二巻』、3・5 ページ
- (40) 註 2 小嶋同書 369-370 ページ